

消防本部紹介

『美しい水と緑 みんなで つくる交流拠点都市』

海部南部消防組合

1 海部南部消防組合管内の概要

当消防組合は、昭和48年4月1日に弥富町、十四山村、飛島村の1町2村の一部事務組合として発足しました。平成18年4月1日に弥富町と十四山村が合併し、弥富市と飛島村の1市1村として新たな一步を踏み出し現在に至っています。

位置は、愛知県の西部に位置し、東は名古屋市、西は三重県に接しています。また、南は伊勢湾に面していることもあり、名古屋港を構成する有数のふ頭が存在します。伝統的な水郷田園が広がる農業地帯、開発の進む都市近郊地域、臨海工業地域が存在し総面積は約70.7km²で南北に細長い地形を有している地域です。



《組合所在地》

2 管内の紹介

(1) 地勢

当組合が管轄するこの地域は、濃尾平野の南端にあり、木曾三川（木曾川・長良川・掛斐川）により形成された沖積平野であります。土地の歴史は海から始まり、平安時代の終わりごろに荘園領主が農地を増やすために、木曾川河口の洲に農民を送り込みました。これがこの地方の新田開発の始まりといわれています。そして、江戸時代になると土木技術も進歩し、新田の開発が盛んに行われるようになりました。その開拓の歴史の中でも、特に飛島村の1801年に行われた飛島新田の開拓は767ヘクタールと規模が大きく、大変困難を極めた開拓でした。この新田開拓は、当時、熱田奉行兼船奉行であった津金文左衛門が尾



《津金門左衛門の像》

張藩主の命を受けて開墾されたもので、現在も飛島村開拓の恩人として、元松神明社に銅像としてその姿を留め、飛島の地を見守り続

けています。

交通網としては、中部圏と関西圏を結ぶ東名阪自動車道、伊勢湾岸自動車道、国道1号線、23号線が東西に横断し、南北には国道155号線、302号線が縦断しています。また、名古屋港を構成するコンテナふ頭があり、海上輸送と陸上輸送の要所として近年目覚ましい発展をみせています。

(2) 文化・観光

弥富市には国の重要文化財に指定されている服部家住宅があります。服部家は織田信長との戦乱の後、代々近郷の総庄屋をつとめた旧家で苗字帯刀を許されていました。現在残っている主屋は天正年間に建てられたものと伝えられ、400年以上経っています。県内でも有数の古民家で、主屋のほか表門、離れ座敷、文庫蔵などが国の重要文化財に指定されています。

また、愛知県の指定文化財である銅造阿弥陀如来坐像が弥富市の龍華山弥勒寺に納められています。この仏像は、弥勒寺の本尊で、背面の刻銘には、明応9年（1500）藤原宗次の作とあります。宗次は梵鐘や鰐口の鑄工として知られ、仏像の専門でない鑄工が作った貴重な仏像であります。弥勒寺は、仏像と同じ明応9年の創立で、もともと現在のあま市七宝町伊福にありましたが、戦国時代の戦禍



《服部家住宅（見学要予約）》



《臨海地区》



《銅造阿弥陀如来坐像》

により寺は失われ、仏像だけが伝えられました。寺は元禄4年（1691）に鳥ヶ地新田に再興され、同12年現在の地に移されました。

飛鳥村には、開拓史に残る歴史遺産として「お経堂」と呼ばれ、人々に親しまれている一切経蔵があります。経蔵は文化7年（1810）、海が埋め立てられて飛鳥新田が開拓されたとき、多くの魚介類や虫が死んだのを哀れに思い、その供養をするために建てたといわれています。このお堂は、木造瓦葺きで、寄せ棟、土蔵造り、外壁は黒塗りの板囲いになっていて、堂の入口には円形の灯袋を持つ珍しい灯籠が一对あります。境内敷地の一部が高くっており、さらに角石で基礎を築き、その上にお堂があります。このためお堂は伊勢湾台風のときも水没せず、村人の避難場所にな



《飛島村のお経堂》

りました。

教育の分野では、飛島村において小中一貫校の飛島学園が平成22年4月から開校し、ひとりひとりに学ぶ喜びや、きめこまかな充実した指導教育が実現できるように取り組みがされています。毎年夏休みには中学校2年生全員を対象とした飛島村海外派遣事業が行われ、異文化に接し、自分の体で直接見聞することにより、グローバルな視点から郷土を見直し、将来の飛島を担う人材の育成を図っています。



《小中一貫校の飛島学園》

(3) 産業 (農業)

弥富市の生産量日本一を誇る「金魚」は、生産地としてだけでなく、流通拠点としても我が国有数の市場となっており、日本にいる金魚の全品種である約25種類すべてが弥富市で揃います。弥富金魚の始まりは、約140年

前にさかのぼります。ある郡山（奈良県）の金魚商人が、東海道五十三次の熱田の宿（名古屋市）をめざす道中、前ヶ須（弥富市）の宿場町で金魚を休ませる池を作って放したところ、その愛らしい姿に魅せられた寺小屋の権十郎がこの金魚を気に入り、購入し、飼育を始めたことが起源となりました。やがて明治に入り、佐藤宗三郎によって採卵・孵化が成功、本格的な養殖が始まりました。



《宇宙へ飛んだ弥富金魚》

日本一の金魚の産地を支えた要因は、当地域が木曽川下流の水郷地帯で、水量・土質共に金魚に最適だったことが由来といわれています。平成4年、宇宙飛行士の毛利衛さんとともに弥富の鯉が、平成6年には宇宙飛行士の向井千秋さんとともに弥富の金魚がスペースシャトルに同乗して宇宙実験で活躍しました。

この地域の農産物は、木曽川の豊富な水の恵みにより水稻、野菜を中心に農産物の生産が行なわれてきました。お米は伊勢湾台風の被害を教訓に8月に収穫される早場米が作られ、野菜ではみつばの水耕栽培やハウストマト、ほうれん草、ねぎ、観葉植物、切花、露地栽培のイチジクなどが作られています。



《 8 月に収穫される早場米 》

(工業)

伊勢湾に面する南部は臨海工業地域となっており、名古屋港における貿易の重要拠点としてコンテナふ頭が整備され、伊勢湾岸自動車道の開通とともに新たな物流の要所となっています。そのため輸送関連の会社や大規模倉庫群、さらには石油コンビナートや木材、鉄鋼、造船等に関連した工業地帯が形成されています。そして、航空宇宙産業に携わる企業もあり、米国航空機会社の次期主力航空機部品が生産されています。また、国産のH2Aロケットを生産する工場もあり、H2Aロケットに続きH2Bロケットの生産も開始されています。

名古屋港は、世界を結ぶ海の玄関口で世界150の国や地域の港と結ばれており、今後はアジアの成長を取り込み、日本経済と産業を



《 飛鳥ふ頭 》



《 航空機産業 》

支援する「国際産業ハブ港」を目指し、港湾機能のさらなる強化が取り組まれています。

飛鳥ふ頭、鍋田ふ頭には、現在5つのコンテナターミナルがあり、12バース、27基のガントリークレーンを有しています。大深度コンテナバースや、24時間稼働の完全IT自動化ターミナルも整備されています。



《 鍋田ふ頭 》



《 ふ頭に係留された大型コンテナ船 》



《消防本部庁舎》

4 消防組合の紹介

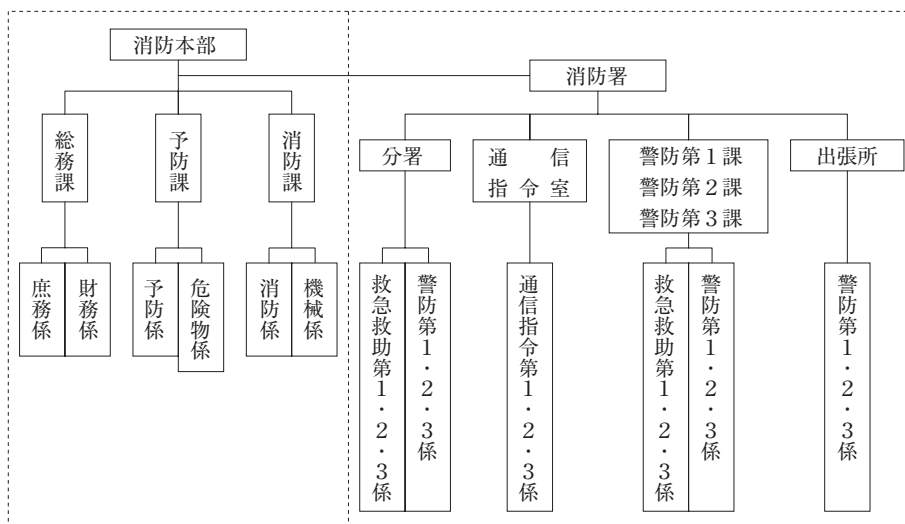
海部南部消防組合は、1消防本部、1消防署、1分署、1出張所で消防職員数は101名です。管轄人口約5万人の住民の生命、身体、財産を守るために、日々研鑽し消防業務に取り組んでいます。

平成22年中の火災件数は34件、救急件数は2,319件で、火災については、前年比17件の減少でしたが、人口比率では依然に高い水準で推移しています。特異火災としては、野積み金属スクラップの山が燃え、出火から鎮火まで約30時間を要した事例があります。

(1) 危険物施設

管内の危険物施設は、平成23年3月31日現在678施設あります。当組合の特徴としては、

コンテナふ頭を利用した海上輸送と、東名阪自動車道や伊勢湾岸自動車道をはじめとする陸上輸送というように、輸出入に伴う複合輸送の基地として、また、名古屋市の石油精製地区が近郊に存在するため輸送車両基地として、様々な危険物施設が存在し、屋内貯蔵所では、大規模な倉庫やNaS電池の倉庫があります。屋外タンク貯蔵所では、火力発電所が存在することもあり特定屋外タンク貯蔵所が21施設、移動タンク貯蔵所では、危険物の輸出入に伴い国際輸送用タンクコンテナによる流通が非常に盛んで、国際輸送用積載式移動タンク貯蔵所は122施設、自家用の給油取扱所が73施設設置されています。そして、輸出入に伴う



《消防本部・消防署組織図》



《国際輸送用積載式移動タンク貯蔵所》

危険物コンテナの仮貯蔵についても、際立って承認件数が多いのが特徴となっています。

(2) 石油コンビナート等特別防災区域

飛鳥村の一部の沿岸部は、石油コンビナート等特別防災区域の名古屋港臨海地区に指定されています。名古屋港臨海地区は、名古屋市、知多市、東海市、飛鳥村の区域で構成されており、飛鳥村域は、第1種特定事業所として2事業所があります。

施設区分	施設数
製造所	0
屋内貯蔵所	79
屋外タンク貯蔵所	59
屋内タンク貯蔵所	15
地下タンク貯蔵所	42
簡易タンク貯蔵所	1
移動タンク貯蔵所	328
屋外貯蔵所	8
給油取扱所	104
販売取扱所	0
移送取扱所	2
一般取扱所	40

危険物仮貯蔵承認件数	
平成20年	1,716件
平成21年	1,663件
平成22年	1,846件



《愛知県石油コンビナート等防災訓練》

防災体制としては、飛鳥共同防災協議会を設立し、大型高所化学放水車、泡原液搬送車の2点セット、また、当組合に大型高所放水車、大型化学車、泡原液搬送車の3点セットが配備されています。

特定事業所の中部電力㈱西名古屋火力発電所では現在、重油・原油・ナフサを燃料とする発電設備で敷地内の屋外貯蔵タンクで燃料を貯蔵していますが、今後は、既存の発電設備を廃止し、世界最高水準の高効率液化天然ガス（LNG）焚きコンバインドサイクル発電設備（220万kW級）を建設する計画が発表されています。この計画では平成31年度の営業運転開始を目指しており、危険物施設を含め、大規模な施設の改修が見込まれています。今後は新たな火力発電設備とそれに対応充実した防災体制が期待されています。



《飛鳥共同防災協議会》



《伊勢湾台風による被害状況》

5 おわりに

当管内は近年、東海・東南海・南海地震の三連動による大きな揺れによる被害が危惧されています。今年3月11日に起きた東日本大震災のように地震による巨大な津波に襲われる可能性もあり、一層の消防防災体制の充実に向け、消防署、消防団、地域住民自治会、事業所との連携の強化を推進しています。

また、この地域は海拔ゼロメートル地帯であり、昭和34年9月26日に昭和の三大台風の一つである伊勢湾台風の襲来を受けました。この台風は日本全国に被害をもたらし、特にこの地域では甚大な被害を被りました。

当消防組合は、当時まだ設立されていませんでしたが、現在の管轄区域である当時の十四山村（現弥富市）、飛島村、弥富町（現弥富市）は水没し、当該町村における死者・行方不明者490人、住家の流失・全壊1,422戸、半壊1,714戸、浸水1,421戸と甚大な被害を被りました（資料：愛知県災害誌）。中でも弥富町の鍋田干拓地では住民の42%が亡くなりました。この想像を絶する被害は、「防災の日」及び「災害対策基本法」制定の契機となりました。

災害を忘れないためには、機会をとらえて災害の実態を振り返り、その教訓を学ぶことが大切です。今後も伊勢湾台風で得た教訓を風化させないためにも、防災思想普及のための行事や



《海拔ゼロメートルを示す標識》



《ドクターカー運用》

訓練などを行っていきます。

さらに、新たな取り組みとして、河川での水難事故に対応するための潜水隊の整備や、管内の二次医療機関と連携したドクターカーの運用をスタートさせています。

災害については、年々複雑多様化の一途をたどっていますが、伊勢湾台風の被害から復興を遂げたこのまちで、いかなる大きな災害が起ころうとも職員一丸となって、災害から住民の生命・身体・財産を守るよう努力してまいります。